平成３年度厚生省心身障害研究
「地域・家庭環境の小児に対する影響に関する研究」

小児の養育における父親の役割について，第３報

（分担研究：小児の健康と養育条件に関する研究）

高橋種昭＊　高野　陽＊＊　小宮山要＊＊＊
窪　龍子＊＊＊＊　丹羽洋子＊＊＊＊＊

要約：今年度は，前年度に開始した父性の発達に関する縦断的研究を，生後12ケ月の時期まで継続して行なった。調査対象は前年度と同じ家庭で，生後１ケ月，４ケ月，６ケ月，８ケ月，10ケ月，12ケ月の６回の時期に，質問紙によりその間の生活や父親としての意識や感情の変化について調査を行なった。

その結果，父親となってから１年間の父親としての意識や感情の変化は著しいものがあり，子どもへの愛情の深まりとともに，子どもを加えた新しい家庭づくりに向けての意欲がほとんどのケースに認められた。妻へのいたわりの感情や理解も深まり，協力的姿勢が多くのケースに見られた。

また，これまで３年間にわたって行なってきた研究をもとに，今後さかんに行なわれることが期待される父親教育についての提言を行なった。その内容は，父親（父性）の存在，父子の関わりの意義，夫婦関係の重要性，父性不在など父親をめぐる問題について父親たちに教えることの必要性とその根拠に関したものである。

見出し語：父性，父親の役割，父親教育

研究目的：今年度の研究は，前年度から引き続いて行なっている父性の発達に関する縦断的研究をさらに生後12ケ月まで延長して行ない，その結果から父性の発達状況や，妻や子ども，家庭に対する父親としての意識がどのように変化していくかを明らかにするとともに，過去３年間に行なった研究結果をふまえて，今後ますます保健指導の場などで活発に行なわれることが予想される父親教育の方向性や骨子となるものについての提言を行なうことを目的としたものである。

研究方法：研究１は東京都に隣接するＵ市の民間の保健指導機関に来所している家庭の父親を対象にして昨年度から継続して行なっている父性の発達に関する縦断的研究であり，生後12ケ月までの間の父親の生活や意識の変化について調べたものである。

研究Ⅱは，我々が過去３年間にわたって行なってきた調査研究の結果を中心に，既刊の文献や資料をもとに，今後行なわれる父親教育の方向性について研究者一同で検討のための会合を持ち，まとめたものである。

研究Ⅰ：父子関係と父性の発達についての縦断的研究（生後１カ月～12カ月）

1. 調査目的

本調査の目的は，父親の生活や意識が子ども

＊　日本女子大学家政学部（Faculty of Home Economics, Japan Women's University）
＊＊　国立公衆衛生院（The Institute of Public Health）
＊＊＊　桜美林短期大学（Obilin Junior College）
＊＊＊＊　和泉短期大学（Izumi Junior College）
＊＊＊＊＊　育児文化研究所（The InStitute of Childcare）

の誕生および成長に伴って，どのように変化していくかを明らかにする縦断的研究である。

2. 調査対象と方法

①前年度と同じU市を中心とした京葉地区在住の乳児の父親を対象に，アンケート調査を行った。

同一対象に対し，生後1カ月から12カ月まで，1カ月時，4カ月時，6カ月時，8カ月時，10カ月時，12カ月時と，計6回，成長を追って，繰り返し同じ質問を行う方法をとり，父親の生活と意識変化を縦断的に調査した。

最終回まで協力が得られたのは26歳から41歳までの父親22名である。平均年齢は31.2歳。いずれも子供は第1子。夫婦のほかに同居の親族がいる家庭は1家庭のみ，他は核家族である。

②アンケート調査のフォローのため，12カ月の調査終了後，対象の父親に対し，面接調査を行った。

③母親が父親をどのように評価しているのかを明らかにし，①の調査と対応させ，参考にするため，12カ月の調査が終了後，対象の父親の妻（母親）に対して，アンケート調査を行った。

3. 結果と考察

(1) 父親の生活時間の変化

図1に示すように，子供が生まれても仕事の時間は変わらない人がほとんどである。睡眠時間は短くなった人もややいるが変わらない人の方が多い。それに対し，趣味の時間や外に遊びに行く時間は子供が生まれてから短くなった人の方が多い。図には示していないが，テレビを見る時間についても趣味や遊びの時間と同様の傾向がみられた。

(2) 父親の生活全般の変化

小遣いの額や心身の疲労については，子供が生まれる前と比べて目立った変化はみられなかったが，生活の自由，夫婦だけの時間，妻の夫に対する世話，妻のおしゃれは，子供が生まれたことにより，変化していることが明らかである（図2）。しかし，子どもの成長とともに，次第に落着きを取り戻している様子も見られる。

(3) 家庭内の仕事への父親の関わり

食事の支度，洗濯などの家事については妊娠中および生後1カ月頃の父親は，妻を助け，よく行っている様子が見られるが，その後は次第に行わなくなる傾向にある。それらの家事はしたくない，すべきでないと考える父親も見られる。食事の後片付け，掃除についても，食事の支度や洗濯と同様の傾向が見られた。しかし，買い物については他の家事とは異なる位置づけにあるようで，父親達は妊娠中から12ケ月まで，一貫してよく行っている（図3－①）。

一方，育児については，家事とは異なり，ほとんどの父親が「いつも」あるいは「時々」行っており，1カ月から12カ月まで，育児参加の後退傾向は見られない。（図3－②）

排泄の世話と泣いたときの世話については，「したくない」と思っている父親もいるが，実際に「全然しない」父親はほとんどいない。

このことから，同じ家庭内の仕事であっても，家事と育児とでは，父親の関わり方も，関わる時の意識も異なっていることが明らかである。家事は基本的に妻の仕事，育児は夫婦二人でする仕事というような意識をもつ父親が多いことが推察される。育児に関しては，父親達が，楽しんで，あるいは当然のこととして行っていることも明らかになった。

(4) 父親としての意識

図4に示すとおり「扶養の責任」「毎日世話をする責任」「しつけ・教育をする責任」のいずれも父親達は感じていることがわかる。中でも「扶養の責任」を強く感じている父親が一番多く，次いで「しつけ・教育」「毎日の世話」の順となっている（図4－①）。

現代の父親達が「父親の役割」をどのように捉えているかを示すものとして，興味深い結果である。

一方，母親の側から父親に期待するものを尋ねたところ，やはり母親も「扶養の責任」を最も多くの人が強く期待していた。次いで「しつけ・教育」「毎日の世話」の順となっており，父親群の回答と対応している。

また，個々の夫婦について，妻の期待と夫の責任の感じ方とをそれぞれ対照させてみたが，いずれも一致しているか，あるいは妻の期待以上に夫が責任を感じているという関係が明らかになり，対立的関係の夫婦は見られなかった。

(5) 赤ちゃんの顔を見たときの父親の感情

赤ちゃんの顔を見たとき「思わず声をかけたくなる」父親が非常に多い。「一日の疲労を忘れる」といつも感じる父親が，子どもの成長とともに増えている傾向が見られ，子供との関わりが次第に強くなっていることが推察される。また，関わりの内容が変化していく中で，「思わず声をかけたくなる」から「一日の疲労を忘れる」に少しづつ移行していく様子も見受けられる。（図5）

図5から，父親達は「自分が大変だ」ということよりも「妻が大変だなあ」という思いを抱いていることがわかる。ことに4カ月頃まではその思いが強いことが明らかである。

一方母親群では，「自分が大変」といつも感じている人は，父親群よりも少ない。また，父親達が「自分が大変」と感じている以上に母親達は「夫が大変だ」と感じており，夫婦相互に相手の大変さを思いやっている様子が窺える。

(6) 父親意識の形成

表1は，文章完成法という方法で，父親達に，自分について，妻について，家族について，アンケート回答時の状況を書いてもらったものの中から，多い表現，類似した表現を取り出し，表にまとめたものである。

母親が，1カ月ごろに疲れていてイライラしている様子が，父親達の文章表現の中から読み取れる。しかし，子供が4カ月くらいになると，次第に落ち着き，おおらかさが見られるようになり，次第に，忙しいが一方で子育てを楽しんでいる母親の姿が見えてくる。そして子どもの成長とともに，強くたくましく楽しそうに子育てにとりくんでいる母親，子どもの活動が活発になるにつれ，目が離せなくなり大変な母親の姿が描かれ，10カ月頃には「母親らしくなった」という言葉が多くの父親の文章の中に出現する。

一方父親自身は，自分の状態や意識についてどのように記述しているかというと，1カ月の頃は疲れている妻に対して優しい，優しくしたいなど，妻を思いやっている様子を述べている。早く帰宅して，子どもの顔が見たい気持ちも記述されている。また，妻に対しては，健康を気遣う気持ちと，イライラしないでほしいということが多く記されている。

4カ月になると，父親達は家族との生活が楽しいということを記述している。その一方，自分の時間がないというという記述も目立ち，子供が生まれたことによって，父親自身の生活にも変化が起こってきていることが読み取れる。

6カ月になると，生きがいを感じる，仕事に意欲的になったなどの記述が出現し，子供との関わりをとおして，自分の生き方や存在を見つめる姿も見られる。

また，子どもの成長とともに，次第に子供と遊ぶのが楽しいという記述が目立つようになり，10カ月頃には，父親の自覚，父親の責任などの言葉が出現する。自分を「父親」として意識している姿がクローズアップされる。一方，強くなった母親に対して「気をつかっている」「畏れを抱いている」などの表現もあり，「母親」を尊重している気持ちも窺える。

12カ月になると，子どもの成長を楽しみ，子供と一緒に行動し，子供を楽しませ，そのことを自分も楽しく思う父親像が文章に見える。

自分達の家族についての記述では，1カ月頃は明るく楽しく赤ちゃん中心と，子どもの誕生を喜びをもって受け入れている様子がわかる。このころは，やや興奮気味の表現が見受けられるが，4カ月になると次第に落ち着き，明るいという表現の一方で，家族のつながりという言葉も出現する。そして，月を重ねる毎に，家族としてのまとまりができてきている様子が，記述の中に見え，12カ月となると「家族」が確かなものになってきている様子が窺える。

妻が夫に期待していると思われることは，一貫して「早く帰宅すること」である。また，夫が妻に期待することに「おしゃれ」が多いことは，現代の若い父親の意識として注目したい。

父親が子供との関わりを通して父親意識を育てていくこと，育児期の妻にはその時期毎に適切な夫の支えが必要であること，育児期の父親が早く帰宅できるようにすることの重要性など，この調査の結果が今後の父親教育に反映されることが期待される。今回の調査では，良い父親の父性形成過程が明らかになったが，今後，子供にマイナスの影響を及ぼすような父親につい

図1　生活時間の変化

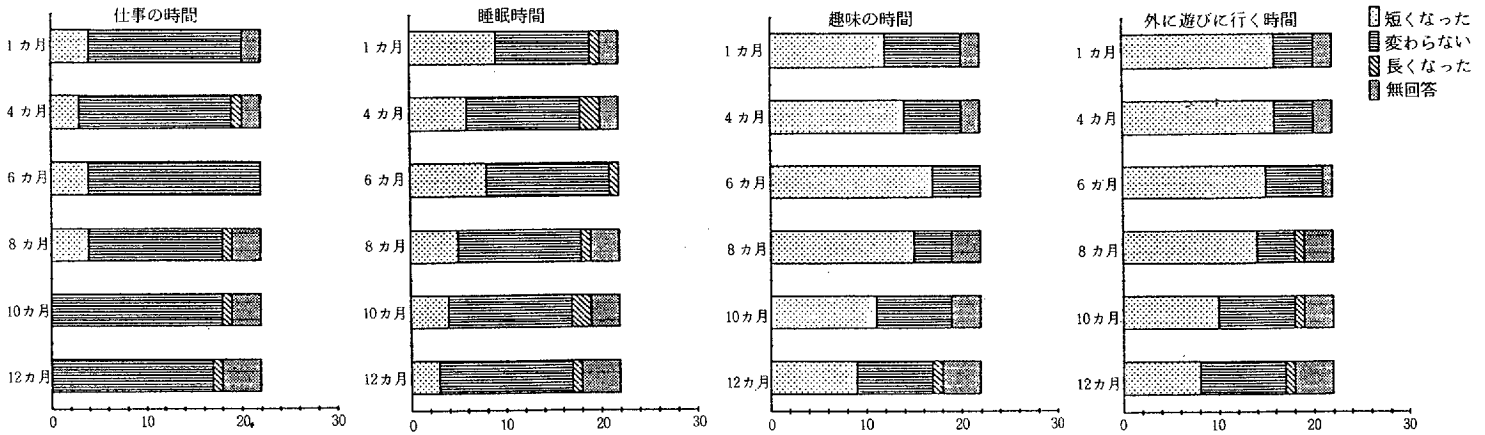

図2　生活全般の変化

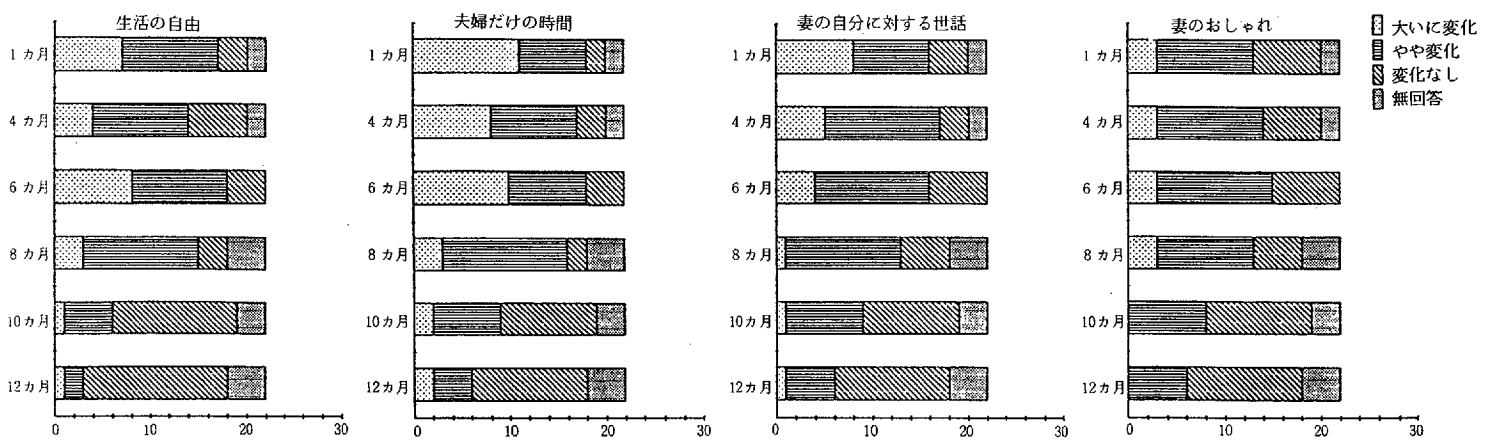

図3－① 家庭内の仕事

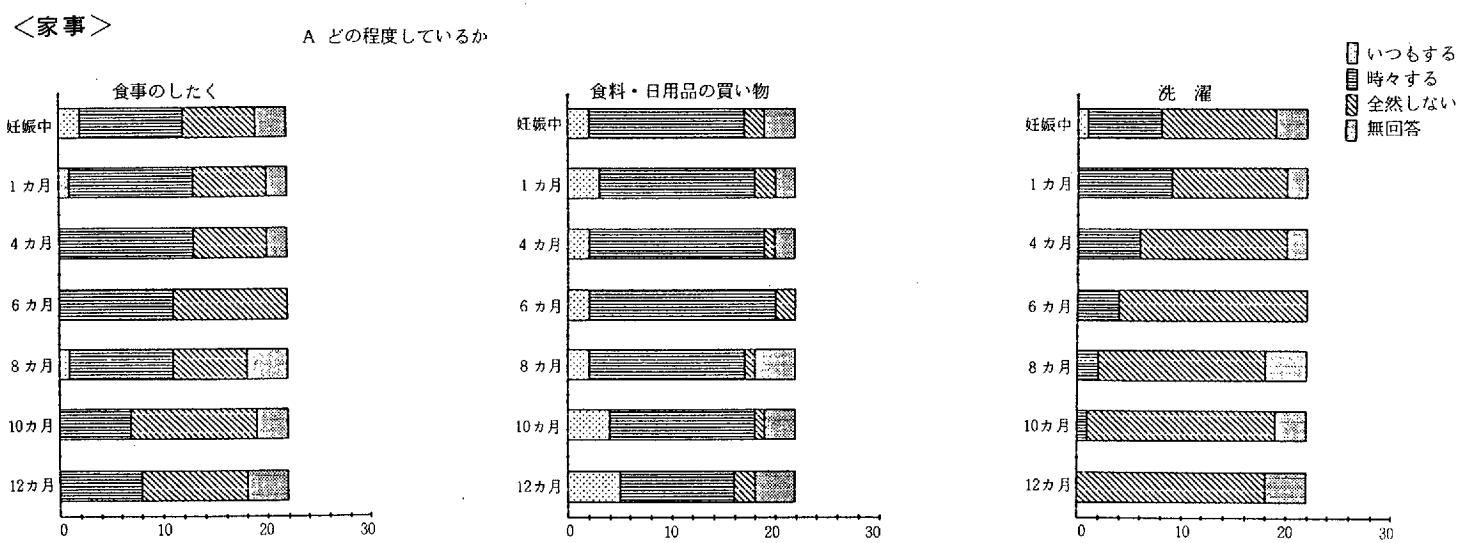
＜家事＞
A どの程度しているか
食事のしたく
食料・日用品の買い物
洗 濯
妊娠中
1カ月
4カ月
6カ月
8カ月
10カ月
12カ月
0
10
20
30
いつもする
時々する
全然しない
無回答

図3－② 家庭内の仕事

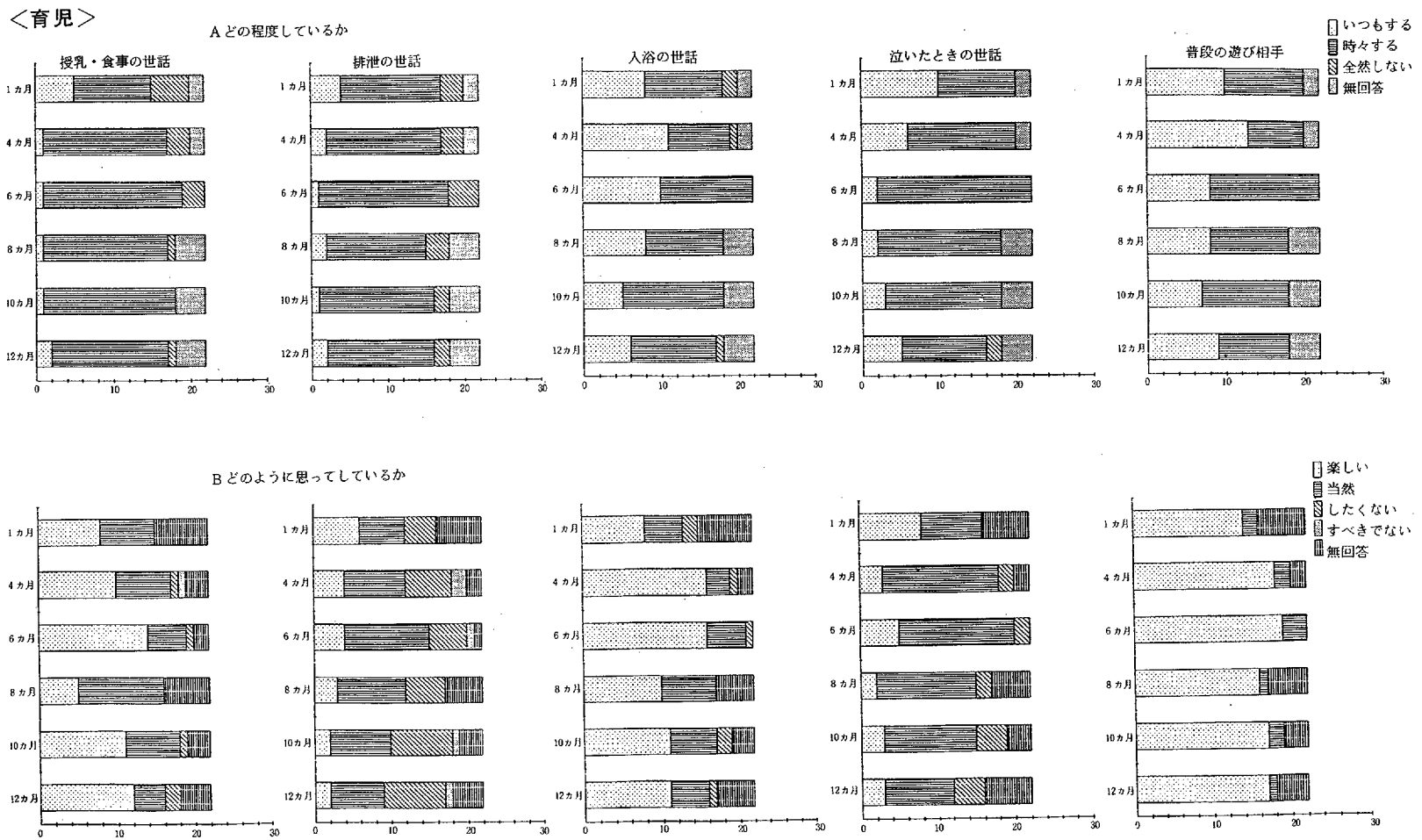
＜育児＞
Aどの程度しているか
授乳・食事の世話
排泄の世話
入浴の世話
泣いたときの世話
普段の遊び相手
いつもする
時々する
全然しない
無回答
1カ月
4カ月
6カ月
8カ月
10カ月
12カ月
0
10
20
30
Bどのように思ってしているか
楽しい
当然
したくない
すべきでない
無回答

図4　父親としての意識

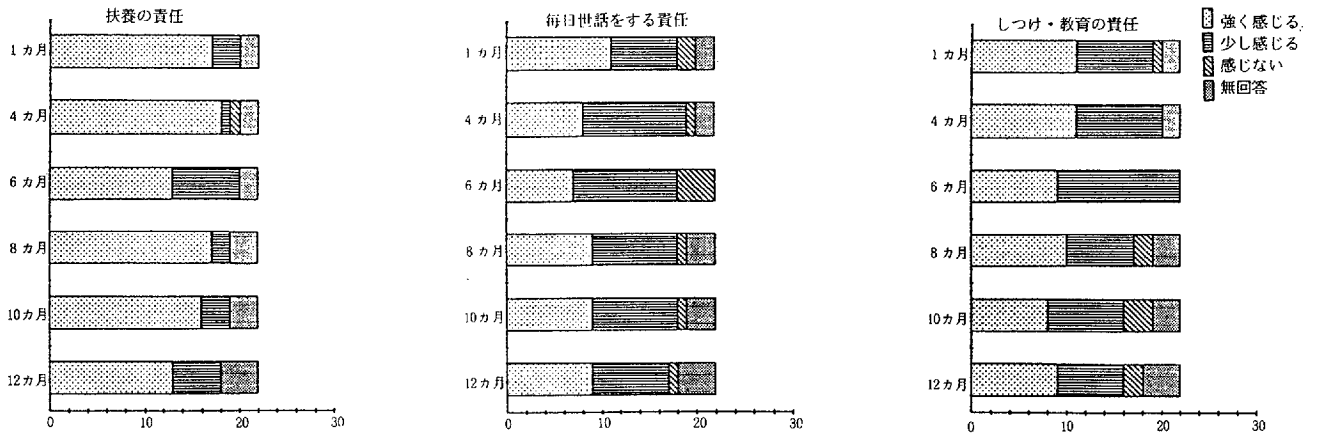

図5　赤ちゃんを見たときの感情

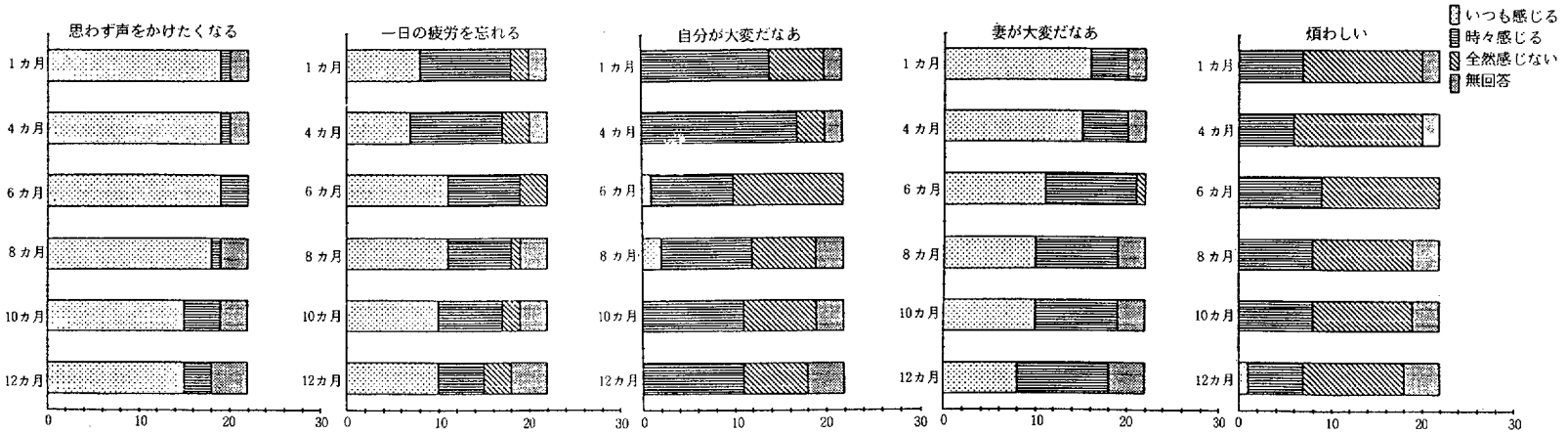

表1　文章作成に表れた父親の意識

	妻の状態	妻に対して思うこと	自分の状態，意識	妻から期待されていると思うこと	家族の状態
1カ月	疲れている，睡眠不足 イライラ，カリカリ	健康に留意して，休息を イライラしないでほしい	妻に優しい，優しくしたい 早い帰宅，子供の顔を見たい	育児・家事 経済力，早い帰宅	明るい，騒がしい，楽しい 赤ちゃん中心
4カ月	落着き，おおらかに 赤ちゃん中心，楽しい おしゃれしなくなった	大変だな，がんばって， 健康に留意して，休養を 神経質にならないで	家族との生活が楽しい 妻に優しい， 自分の時間がない	育児家事の協力 早い帰宅 優しさ，ねぎらい	明るい，賑やか， 家族のつながり 子どもの話題
6カ月	楽しさ幸せを感じている 忙しく大変 自分の時間がない	シェイプアップ，おしゃれを，以前より世話をしてくれるように思う	生きがい，意欲的 健康に留意する 自分の時間が持てない	子どもの世話 良き父親 健康	明るい楽しい，充実感 子供が中心 家族，きずな
8カ月	強い，しっかり，命令口調 かまってくれない いきいき楽しそう	いらいらしないで 若々しくきれいでいて がみがみいわず優しく	家庭・子供が楽しく大事 元気，はりがある 妻に優しい	子どもの世話 早い帰宅	子供中心 明るい，ほのぼの，楽しい， にぎやか，家族で行動
10カ月	子の成長にイキイキ楽しそう 母親らしくなった 育児が大変そう	おしゃれ，運動をして 気を抜いて育児を 子供のケガ，病気に注意を	子供と遊ぶのが楽しい 父親の自覚，責任 妻に優しい，気をつかっている	早い帰宅 家事・育児	明るく賑やか 家族としてまとまってきた 外向的
12カ月	子供と一緒に楽しそう ゆとりができた	きれいでいて欲しい 成長を気にし過ぎないで	成長が楽しい，かわいい 遊びに連れていきたい 子どもの存在が不思議	優しさ，ねぎらい 子供の世話，遊び相手 早い帰宅，	楽しい，笑い，充実 家庭らしくなった （団らん）

ても調査・検討することが必要である。

研究Ⅱ：研究結果からみた父親教育への提言

「小児の養育における父親の役割」に関する3年間の研究の結果，父親教育は小児の養育を円滑，かつ効果的に行なうためにはぜひとも強化充実を図らねばならない今日的課題であることが明らかになった。しかしながら従来，育児教室や保健指導の場などにおいては母親への働きかけが主で，父親への働きかけはややもすればなおざりにされていた傾向がなくもなく，その教育方法や内容についても，十分検討がなされていたとはいえない。

そこで今回の研究においては，3年間の研究結果をふまえ，父親教育を今日的かつ効果的に推進するためのいくつかの提言を根拠を示しながら試みたいと思う。

父親教育の骨子となるものとしては次のようなものがあげられる。

(1)　〝父親〟というものの存在
(2)　〝父性〟の形成過程
(3)　父親と子どもの関わりのもつ意義
(4)　児の養育における夫婦関係の重要性（特に協力関係）
(5)　父性不在の影響
(6)　父親の養育態度の歪み
(7)　新しい時代にふさわしい父親

(1)　〝父親〟というものの存在

父親とはどのような存在か，ということを母親との関係において正しく理解させることは非常に重要な教育課題である。特に乳幼児の場合は従来から育児の主役は母親であり，父親はあくまでも脇役に甘んじていたし，それでよしとされていた。しかしそれは誤りであり，育児においてはあくまでも両親が主役であることを認識させることは，父親に親としての責任を自覚させるためにぜひとも必要なことである。と同時に，当然のことながらその存在が母親と異なる存在であることも理解させねばならない。しかし，この当然のことが理解されていない現実，つまり，今日においては家庭の中での父親の地位や役割の混乱があることについても十分な認識が必要であろう。要するに，ここで〝父親〟でなくては果たせぬ役割とは何かということについて学ばせたいわけである。

(2)　〝父性〟の形成過程

父親は母親の場合とは異なり，直接妊娠，出産という経験をするわけではないので，父性の形成がどのような形で行なわれるかについてはあまり研究も行なわれておらず，不明の部分が多かった。しかし，我々の今回の妻の妊娠期から

児が12ケ月になるまでの夫からの報告によると，その受けとめ方などに違いはあるにしても，父親に自分がなるという事実の告知から，出産，育児という過程の中で，目覚ましく精神的にも成長し，父親としての自覚が育っていくことが記されていた。我が子との最初の対面における驚きに似た感情から始まり，我が子との接触を通じ，月日の経過とともに我が子への愛情が深まり，子どもを含めた新しい家庭づくりへの意欲をわかせていく様が多くの父親に見られた。こうした父性の形成については，やはりその段階段階における適切な指導が必要と思われる。なぜなら子どもを育てるなかで，父親の生活への皺寄せは大きく，妻のサービスの低下などもあってそれまでの生活とのずれに対する不満もかなりみられたので，適切な助言がそうした危機的状況への対処のためには必要と考えられるからである。

(3) 父親と子どもの関わりのもつ意義

父親と子どもの関わりは，食事や排泄の世話，あるいは入欲時におけるスキンシップ的な接触，遊び相手など多くのものがあるが，やはり父親としては，父親らしいというより男性としての接触を子どもが欲し期待していることを知らねばならない。遊び相手の場合など身体運動を主とした激しい動きを伴った遊びは子どもが父親に最も強く求めるものである。そうした形での父子の接触を通じて，子どもは男性と女性というふたつの異なる性の存在を知るわけであり，このことも子どもにとっては貴重な学習の機会となるものである。男性がどのようなものであるかということは，母親がいくら努力をしても教えることのできないことであり，父親の存在意義の最たるものともいえる。社会学では父親を道具的存在というが，子供の成長にとってこの父親の道具的存在が教えるものは非常に多いはずである。そして，ときには権威の原体験を教える存在として父親は子どもに対してほしいわけで，そのことは子どもの自我形成のうえでも非常に大きな働きをなすものとされている。父親はただ単なる子どもの遊び相手であっては困るわけである。そうした父親の役割についても，我々の調査対象となった人々の多くははっきりと認めていた。

(4) 児の養育における夫婦関係の重要性

最近母親の育児不安がしばしば話題となり，それは子どもの健全育成の障害となっているが，この場合も，夫の協力，支援の有無が不安の発生のひとつの要因になっている。このことについては昭和63年度の報告にも記したが，調査の結果からも明らかであり，いかに夫婦の間における相互理解，相互援助が育児にとって重要であるかがわかる。今回の調査においても，父親たちの多くは，妊娠，出産という妻の大変な身体的一精神的負担に理解を示しているが，妻にばかりその負担を課することは結局は夫婦関係の崩壊にもつながり，重大な危機をもたらす恐れがあることを夫たる父親は知らねばならない。しつけにおいても，夫婦の間に一致が見られないときには，その徹底は期待できず，混乱のみが生じ，子どもの性格形成にも歪みが生じることが十分予想され，協力，理解がぜひとも必要であることを夫婦ともに知らねばならない。夫としての役割にさらに父親という役割が加わる新しい生活のなかでの役割適応を順調に行なうためには，やはり夫婦関係がどのような状態にあるかがその鍵となるものである。

(5) 父性不在の影響

小児の情緒障害や非行などの発生の背景に〝父性不在〟というものが存在しているといわれているが，(1)のところでも述べたように家庭において父親は貴重な成人男性であり，家族の物質的，精神的な支えとしても存在するわけで，その存在が不在ということが家族にとって非常な危機的状況であるのは当然であろう。

父親でなくては与えられぬものは，乳幼児期においては学童期や成年期に比べれば少ないという考えが成り立つかもしれないが，繰り返し述べたように，父親の場合子どもとの直接的な関わりにおいてだけでなく，母親を介しての影響もすこぶる大であることを見逃してはならない。母親の好ましい育児態度の背後には，夫のしっかりした支援が必要なことを夫としても十分に知っておかねばならない。〝父親らしい父親〟が不在ということは，父親が父親としての役割を果たしていないということであり，この

ことは当然父親が己れの役割の何たるかを知らぬことから始まるわけである。

(6) 父親の養育態度の歪み

父親の中にはこれも当然のことながら好ましくない養育態度を示すものもいるわけであり，妻子から拒否されている例も決して少ない数ではない。今回の研究では，こうした父親の問題には直接触れなかったが，母親（妻）や子供の父親（夫）に対する期待については多くの知見を得たわけで，要するにそうした妻や子の期待を裏切るような態度をとる父親は歪んだ養育態度の持ち主ということになろう。子どもと全然遊んでくれない，世話もしてくれない，しつけも母親任せ，感情的に子どもや妻に拒否的な態度をとる，いたわりややさしさにかける，頼もしさにかける，などいろいろな歪んだ父親の養育態度があげられるが，こうした父親の養育態度の歪みの背景には多くの要因が考えられる。中でも子どもや妻へ理解・愛情の不足，誤った期待，心身の健康状況の不良，役割についての認識の不足，人間としての未熟などは著しく父親の養育態度を歪めるものであろう。したがって，父親指導においても，そうした面への配慮が十分になされねばならない。

(7) 新しい時代にふさわしい父親

父親の存在なり役割も，当然のことながら時代，社会の変化とともに大きく変わっていくものである。したがってこれからの新しい時代にはその時代にふさわしい〝新しい父親〟の出現が待たれるわけである。しかし，いずれの時代，いずれの社会においても父親はあくまでも母親との協力のもとに子育てを行なう存在であり，子どもにとって人生で最も身近に存在する成人の男性であることには変わらないわけであり，両親の関係もまた，子どもにとって人間関係の何たるかを最初に教える存在であることに変わりはないはずである。ただ違うことは，従来のわが国の古い家族制度のなかでの父親と違い，妻との協力のもとに〝自分たちの家庭〟を新しくそれぞれに築いていく使命を負わされた存在であるということである。それは正に〝家族の創造〟である。父親の最も大事な役割は，そうした新しい家庭づくりを妻と子どもとの生活のなかで実現することにあるのである。

おわりに：3年間にわたって行なった今回の「小児の養育における父親の役割に関する研究」をふりかえったとき，現在のわが国の家族生活というものが非常に大きな転換期にあるということを改めて知らされ，新しい時代の父親が，その中から育ってきているということを知った。そして同時に，子どもたちにとって父親は，常にその生活の歴史のなかで作られるものであり，乳幼児期といういわばその基礎づくりの段階での父子のふれあいが，児のその後の父親というものに対する見方や関係に大きく影響するものであることも知り，幼い時期での父子関係の重要性についても改めて知らされた。また，従来のように母親ばかりに偏った親教育でなく，父親への教育的な働きかけを積極的に行なうことの必要性を痛感した。乳幼児の保健指導の場においても，今後，父親教育の重要性を認識し，対象をとらえることの難しさはあるかもしれないが，多くの機会と場を提供していただくことが切に望まれる。

参考文献

1. Lamb M.E. 久米稔他訳，父親の役割，家政教育社　1982
2. Pederson F.A. 依田明他訳，父子関係の心理学，新曜社，1985
3. Carlson B.E. The father's contribution to child care: Effects on children's perceptions of parental roles, American Journal of orthopsychiatry, 54, 123−136, 1984
4. Baruch G.K. & Barnett R.C. Father's participation in family work and children's Sexrole Attitudes, Child Development 57, 1210−1223, 1986
5. Lynn D.B. 今泉信之他訳，父親，その役割と子どもの発達　北大路書房　1986
6. Barnett R.C. & Baruch G.K. Determinents of fathers participation in family work, Journal of Marriage and the family, 49. 29−40, 1887
7. Bron Stein P. & Cowan C.P. Fatherhood Today, Men's changing Role in the Family, John wiley & Sons, Inc. 1988

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約：今年度は，前年度に開始した父性の発達に関する縦断的研究を，生後 12 ケ月の時期まで継続して行なった。調査対象は前年度と同じ家庭で，生後 1 ケ月，4 ケ月，6 ケ月，8 ケ月，10 ケ月，12 ケ月の 6 回の時期に，質問紙によりその間の生活や父親としての意識や感情の変化について調査を行なった。
その結果，父親となってから 1 年間の父親としての意識や感情の変化は著しいものがあり，子どもへの愛情の深まりとともに，子どもを加えた新しい家庭づくりに向けての意欲がほとんどのケースに認められた。妻へのいたわりの感情や理解も深まり，協力的姿勢が多くのケースに見られた。
また，これまで 3 年間にわたって行なってきた研究をもとに，今後さかんに行なわれることが期待される父親教育についての提言を行なった。その内容は，父親（父性）の存在，父子の関わりの意義，夫婦関係の重要性，父性不在など父親をめぐる問題について父親たちに教えることの必要性とその根拠に関したものである。